# 流速時間履歴を規定する非定常自然対流場の形状設計

## SHAPE DESIGN OF UNSTEADY NATURAL CONVECTION FIELDS TO CONTROL TIME HISTORY OF FLOW VELOCITY

片峯 英次1),青木 崇2)

Eiji KATAMINE and Takashi AOKI

1) 岐阜工業高等専門学校 機械工学科 教授	(〒 501-0495	岐阜県本巣市上真桑 2236-2,	E-mail: katamine@gifu-nct.ac.jp)
2) 長岡技術科学大学 修士課程	(〒 940-2188	新潟県長岡市上富岡町 1603-1,	E-mail: s195009@stn.nagaokaut.ac.jp)

This paper presents numerical solution to shape design problems of unsteady natural convection fields to control time history of flow velocity. The square error integral between the actual time history of flow velocity and a target time history of flow velocity on the prescribed sub-domain during the specified period of time is used as the objective functional. Shape gradient of the shape design problem is derived theoretically using the Lagrange multiplier method, adjoint variable method, and the formulae of the material derivative. Reshaping is carried out by the traction method proposed as an approach to solving shape optimization problems. Numerical analyses program for the shape design is developed based on FreeFem++, and the validity of proposed method is confirmed by results of 2D numerical analyses.

*Key Words*: Inverse Problem, Optimum Design, Computer Aided Design, Finite Element Method, Natural Convection Field, Adjoint Method

## 1. はじめに

熱対流を伴う機器設計において、性能改善を目的とした機 器の形状設計は工学的に重要な課題の一つである.例えば、 太陽からの熱エネルギー利用によるソーラータワーと呼ばれ る熱対流式発電プラントに対して、本山ら<sup>(1)</sup>は、発電効率 向上を目的として、ソーラータワー内のタービン位置での流 速が増大するように、ソーラータワー境界形状の設計を実験 的に試みている.計算力学が発展した現代工学において、数 理設計の観点に基づけば、このような問題は、熱対流場の部 分領域において、流速が最大化するように、あるいは流速が 目標値となるように、境界形状を決定する自然対流場の形状 決定問題として捉えることができる.本研究では、このよう な非定常自然対流場の形状設計について取り上げ、これらは 電子機器・デバイスにおけるヒートシンク等の冷却機器の形 状設計に対しても応用が可能であると考えられる.

自然対流場における形状最適化やトポロジー最適化に関 する研究を振り返ると、形状最適化では、桃瀬ら<sup>(2)</sup>が、随 伴変数法を用いて、自然対流場の部分領域における速度の最 大化を設計目標としたときの形状感度解析法を提案してい るが、定常問題の解法に限られている. Park ら<sup>(3)</sup>は、随伴 変数法を用いて非定常自然対流場の形状同定問題の解析法

2019年9月12日受付, 2019年10月8日受理

を提案し,数値解析では,定常問題に対して,境界形状を表 現する設計変数を極力少なく制限したパラメトリックな解析 法を用いた. Aounallah ら<sup>(4)</sup>は,非定常自然対流場の支配 方程式を流れ関数・渦度で表現し,二次元問題の解析に限定 した解析法を提案し,Park ら<sup>(3)</sup>と同様に,極力少ない設計 変数で滑らかな境界形状を表現することのできる Bezier 曲 線を利用して解析を行っている.一方,トポロジー最適化で は,随伴変数法を利用して Alexandersen ら<sup>(5)</sup>が幾つかの最 適化問題に対する定常解析を行い,Coffin ら<sup>(6)</sup>は指定した 領域における平均温度を最小化するための非定常問題の解析 を行っている.

これに対して、著者らは領域の境界形状を分布系の設計 変数で表現した形状最適化に対して検討してきた.これまで に、定常の強制熱対流場に対して、部分領域における温度分 布を規定する形状同定問題<sup>(7)</sup>、さらに非定常の強制熱対流 場<sup>(8)</sup>や自然対流場<sup>(9)</sup>に対して、温度分布時間履歴を規定 する形状設計問題の拡張を試みてきた.これらの解析では随 伴変数法を利用し、また実際の形状最適化手法には力法<sup>(10)</sup> を用いた.この方法では、まず形状更新のための感度を領域 変動に対する分布系感度で評価する.実際の領域変動の解析 には、その領域変動の支配方程式を楕円型方程式の一つで あり、H<sup>1</sup>空間で定義された線形弾性場の境界値問題に置き 換えて解く方法を用いる。その意味で力法は  $H^1$  勾配法 <sup>(11)</sup> とも呼ばれる。形状変動を分布系の領域変動によって表現し ているために,設計境界を表すための設計変数の数を制限す ることなくノンパラメトリックな解析が実現でき,また変動 した後の境界は滑らかさを保持できることが確認されてい る <sup>(11)</sup>.しかしながら,著者らがこれまでに取り扱った熱対 流場問題 <sup>(8)(9)</sup> は,Coffin ら <sup>(6)</sup>と同様に温度分布に基づく 目的汎関数を対象とした温度規定問題であった。

本研究では,流速分布と温度分布が相互に連成しあう非定 常自然対流場において,部分領域における流速時間履歴を規 定する,あるいは流速分布を最大化する形状設計問題の解法 を取り上げる.

本論文では,最初に非定常自然対流場の支配方程式につい て述べる.その後で,部分領域において実際の流速時間履歴 と指定された流速時間履歴の2乗誤差積分を最小化する問 題(流速時間履歴規定問題)を定式化し,Lagrange 乗数法あ るいは随伴変数法および物質導関数を利用して形状修正の感 度となる形状勾配密度関数を導出する.最後に,導出された 形状勾配密度関数に基づいて,力法<sup>(10)</sup>を適用し,2次元問 題の簡単な解析結果を紹介する.

## 2. 非定常自然対流場の支配方程式

 $\mathbb{R}^{d}(d = 2,3)$ の領域 Ω,時間 [0,*T*] における非定常自然対 流場を考える.空間  $\vec{x} \in \Omega$ ,時間  $t \in [0,T]$  における流速分布  $u_{i}(\vec{x},t)$ ,圧力分布  $p(\vec{x},t)$ ,温度分布  $\theta(\vec{x},t)$  を解析することを 考える.非定常自然対流場の支配方程式として,Boussinesq 近似および無次元化された Navier-Stokes 方程式,連続の式, およびエネルギー方程式を考え<sup>(12)</sup>,それらの支配方程式の 弱形式は,任意の試験関数  $w_{i}(\vec{x},t), q(\vec{x},t), \xi(\vec{x},t)$ を用いて, 次のように表すことができる.

$$\int_{0}^{T} \left\{ t^{V}(u,t,w) + a^{V}(u,w) + b^{V}(u,u,w) + c(w,p) + f^{f}(w,\theta) - l(w) \right\} dt = 0$$
(1)

$$\int_{0}^{T} \left\{ c(u,q) \right\} dt = 0$$

$$\int_{0}^{T} \left\{ t^{H}(\theta,t,\xi) + a^{H}(\theta,\xi) + b^{H}(u,\theta,\xi) + f_{q}^{H}(\xi) \right\} dt = 0$$
(2)

ただし, 各項 $t^{V}(u,t,w)$ ,  $a^{V}(u,w)$ ,  $b^{V}(u,u,w)$ , c(w,p),  $f^{f}(w,\theta)$ , l(w),  $t^{H}(\theta,t,\xi)$ ,  $a^{H}(\theta,\xi)$ ,  $b^{H}(u,\theta,\xi)$ ,  $f_{q}^{H}(\xi)$  は次式で与えら れる.

$$t^{V}(u,t,w) = \int_{\Omega} w_{i} \frac{\partial u_{i}}{\partial t} dx, \quad a^{V}(u,w) = \int_{\Omega} \frac{1}{Gr} w_{i,j} u_{i,j} dx,$$
  

$$b^{V}(v,u,w) = \int_{\Omega} w_{i} v_{j} u_{i,j} dx, \quad c(w,p) = -\int_{\Omega} w_{i,i} p dx,$$
  

$$f^{f}(w,\theta) = \int_{\Omega} \frac{1}{Gr} w_{i} e_{i} \theta dx, \quad l(w) = \int_{\Gamma_{\sigma}} w_{i} \hat{\sigma}_{i} d\Gamma,$$
  

$$t^{H}(\theta,t,\xi) = \int_{\Omega} \xi \frac{\partial \theta}{\partial t} dx, \quad a^{H}(\theta,\xi) = \int_{\Omega} \frac{1}{Ra} \xi_{,i} \theta_{,i} dx.$$
  

$$b^{H}(u,\theta,\xi) = \int_{\Omega} \xi u_{j} \theta_{,j} dx, \quad f^{H}_{q}(\xi) = \int_{\Gamma_{q}} \xi \hat{q} d\Gamma$$
(4)

ここで, *Gr*, *Ra* はグラスホフ数, レイリー数を表し, グ ラスホフ数 *Gr*, レイリー数 *Ra*, プラントル数 *Pr* の関係 *Ra* = *Gr* · *Pr*, さらに, グラスホフ数 *Gr* とレイノルズ数 *Re* の関係 *Gr* = *Re* を仮定して無次元化している<sup>(12)</sup>. また  $e_1 = e_3 = 0, e_2 = -1$  である.本論文のテンソル表示では Einstein の総和規約と偏微分表示 (·),*i* =  $\partial$ (·)/ $\partial x_i$  を使用 し, (·),*t* は時間の導関数を表わしている.また, 領域 Ω の 境界 Γ は, 流れ場の境界条件に関して基本境界  $\Gamma_u$  と自然境 界  $\Gamma_\sigma$ , 温度場に関しては基本境界  $\Gamma_\theta$ , 熱流束境界  $\Gamma_q$  によっ て構成され, その境界条件, 初期条件は次のように定義され ている.

$$u_{i}(\vec{x},t) = \hat{u}_{i}(\vec{x},t), \quad t \in [0,T], \ \vec{x} \in \Gamma_{u}$$
(5)  
$$\sigma_{i}(\vec{x},t) = (-p\delta_{ij} + \frac{1}{Cr}u_{i,j})n_{j} = \hat{\sigma}_{i}(\vec{x},t),$$

$$t \in [0, T], \ \vec{x} \in \Gamma_{\sigma}$$
 (6)

$$\theta(\vec{x},t) = \hat{\theta}(\vec{x},t), \quad t \in [0,T], \ \vec{x} \in \Gamma_{\theta}$$
(7)

$$-\frac{1}{Ra}\theta(\vec{x},t)_{,j}n_j = \hat{q}(\vec{x},t), \quad t \in [0,T], \ \vec{x} \in \Gamma_q \quad (8)$$

$$u_i(\vec{x}, 0) = u_{i_{ini}}(\vec{x}), \quad \vec{x} \in \Omega$$
(9)

$$p(\vec{x},0) = p_{ini}(\vec{x}), \quad \vec{x} \in \Omega$$
(10)

$$\theta(\vec{x},0) = \theta_{ini}(\vec{x}), \quad \vec{x} \in \Omega$$
(11)

ここで,  $\hat{q}$ は熱流束,  $u_{i_{ini}}$ は初期流速,  $p_{ini}$ は初期圧力,  $\theta_{ini}$ は初期温度を表し,  $n_j$ は境界における単位法線ベクトル, (.)は境界における既知関数を表している. 流速  $u_i$ および  $w_i$ はそれぞれ式 (12),(15)の関数空間の要素, 圧力 pおよび qは式 (13)の関数空間の要素, 温度 $\theta$ および $\xi$ はそれぞれ式 (14), (16)の関数空間の要素とする.

$$U = \{ u(\vec{x}, t) \in H^{1}(\Omega \times [0, T]) \mid u_{i}(\vec{x}, t) = \hat{u}_{i}(\vec{x}, t), \ t \in [0, T], \ \vec{x} \in \Gamma_{u} \}$$
(12)

$$Q = \{q(\vec{x}, t) \in L^2(\int_{\Omega} q \ dx = 0 \ (\text{if } \Gamma_{\sigma} = \emptyset)\}$$
(13)

$$\Theta = \{\theta(\vec{x}, t) \in H^{1}(\Omega \times [0, T]) \mid \\ \theta(\vec{x}, t) = \hat{\theta}(\vec{x}, t), \ t \in [0, T], \ \vec{x} \in \Gamma_{\theta}, \\ -\frac{1}{Ra}\theta(\vec{x}, t)_{,j}n_{j} = \hat{q}(\vec{x}, t), \ t \in [0, T], \ \vec{x} \in \Gamma_{q} \}$$
(14)  
$$W = \{w_{i}(\vec{x}, t) \in H^{1}(\Omega \times [0, T]) \mid \\ w_{i}(\vec{x}, t) = 0, \ t \in [0, T], \ \vec{x} \in \Gamma_{u}, \ w_{i}(\vec{x}, T) = 0, \ \vec{x} \in \Omega \}$$

$$\Xi = \{\xi(\vec{x}, t) \in H^{1}(\Omega \times [0, T]) \mid \\ \xi(\vec{x}, t) = 0, \ t \in [0, T], \ \vec{x} \in \Gamma_{\theta}, \quad \xi(\vec{x}, T) = 0, \ \vec{x} \in \Omega\}$$
(16)

ここで,  $H^m(\Omega \times [0,T])$  は *m* 階の導関数まで領域  $\Omega \times [0,T]$ で 2 乗可積分な関数空間,  $L^2(\Omega \times [0,T])$  は有界可積分なス カラー関数空間を表す.

# 3. 部分領域における流速時間履歴規定問題

## **3.1. 問題の定式化**

(3)

部分領域  $\Omega_D \subset \Omega$  において,時間  $t = t_1 \in [0,T]$  から  $t = t_2 \in [0,T]$  における実流速時間履歴  $u_i(\Omega_D, [t_1, t_2])$  と規 定された流速時間履歴  $u_{Di}(\Omega_D, [t_1, t_2])$  との 2 乗誤差を最小 化する問題を定式化する. この自然対流場領域  $\Omega$  の領域変 動を  $T_s$  (s は領域変動の履歴) で定義し,領域  $\Omega$  は変動して  $\Omega_s = T_s(\Omega)$  になると仮定する.  $T_s(\Omega)$  は,領域変動の制約 を満たす適当に導関数が連続な許容関数空間 D の要素とす る. 簡単化のために,領域変動の制約に  $\Omega_D$  が含まれると仮 定する. このとき,時間  $t = t_1$  から  $t = t_2$  における流速 2 乗誤差最小化問題は次のように定式化される.

 $\int_{t_1}^{t_2} E_{\Omega_D}(u) \, dt$ 

d 
$$\Omega_s \in D$$
 (17)

that minimizes

subject to

Fin

$$\int_{0}^{T} \left\{ t^{V}(u,t,w) + a^{V}(u,w) + b^{V}(u,u,w) + c(w,p) + f^{f}(w,\theta) - l(w) \right\} dt = 0 \quad (19)$$

(18)

$$\int_{0}^{T} \left\{ c(u,q) \right\} dt = 0 \tag{20}$$

$$\int_{0}^{T} \left\{ t^{H}(\theta_{,t},\xi) + a^{H}(\theta,\xi) + b^{H}(u,\theta,\xi) + f_{q}^{H}(\xi) \right\} dt = 0$$
(21)

ここで、 $E_{\Omega_D}(u)$ は流速時間履歴2乗誤差を表しており、以下のように定義されている.

$$E_{\Omega_D}(u) = \int_{\Omega_D} (u_i - u_{D_i}) \cdot (u_i - u_{D_i}) dx \qquad (22)$$

## 3.2. 形状勾配関数

式 (17)~(21) の問題は, Lagrange 乗数法によって制約の ない停留化問題に書き換えることができる. この場合の Lagrange 関数  $L(u_i, p, \theta, w_i, q, \xi)$  は次式で与えられる.

$$L = \int_{t_1}^{t_2} E_{\Omega_D}(u) dt$$
  
-  $\int_0^T \left\{ t^V(u, t, w) + a^V(u, w) + b^V(u, u, w) + c(w, p) + f^f(w, \theta) - l(w) \right\} dt - \int_0^T \left\{ c(u, q) \right\} dt$   
-  $\int_0^T \left\{ t^H(\theta, t, \xi) + a^H(\theta, \xi) + b^H(u, \theta, \xi) + f_q^H(\xi) \right\} dt$   
(23)

ここで、 $w_i \in W, q \in Q, \xi \in \Xi$ は非定常自然対流場の支配方 程式に関する Lagrange 乗数関数(または随伴変数)になっ ている.

領域変動に対する L の導関数  $\dot{L}$  は速度場  $V_i(\Omega_s) = \partial T_s / \partial s(\Omega) = \partial T_s / \partial s(T_s^{-1}(\Omega_s))$  を用いて、次のように得られる<sup>(10)</sup>.

$$\begin{split} & L = \\ & - \int_0^T \Big\{ t^V(u,t,w') + a^V(u,w') + b^V(u,u,w') + c(w',p) \\ & + f^f(w',\theta) - l(w') \Big\} \, dt - \int_0^T \Big\{ c(u,q') \Big\} \, dt \\ & - \int_0^T \Big\{ t^H(\theta,t,\xi') + a^H(\theta,\xi') + b^H(u,\theta,\xi') + f_q^H(\xi') \Big\} \, dt \\ & - \int_0^T \Big\{ t^V(u',t,w) + a^V(u',w) + b^V(u',u,w) + b^V(u,u',w) \Big\} \, dt \end{split}$$

$$+c(u',q) + b^{H}(u',\theta,\xi) \Big\} dt + \int_{t_{1}}^{t_{2}} E_{\Omega_{D}}(u') dt - \int_{0}^{T} \Big\{ c(w,p') \Big\} dt - \int_{0}^{T} \Big\{ f^{f}(w,\theta') + t^{H}(\theta'_{,t},\xi) + a^{H}(\theta',\xi) + b^{H}(u,\theta',\xi) \Big\} dt + < Gn_{i}, V_{i} >$$
(24)

ただし, (·)' は空間座標に固定した分布関数の領域変動に 対する導関数を表す.また,

$$< Gn_i, V_i >= \int_{\Gamma} Gn_i \cdot V_i \, d\Gamma$$

$$G = \int_0^T \{ -\frac{1}{Gr} w_{i,j} u_{i,j} - w_{i,i} p - \frac{\partial \theta}{\partial t} \xi - \frac{1}{Ra} \xi_{,i} \theta_{,i}$$

$$-\nabla_n (\xi \hat{q}) - (\xi \hat{q}) \kappa \} \, dt$$
(25)
(25)
(25)

ただし,  $\nabla_n(\cdot) \equiv \nabla(\cdot) \cdot \vec{n}$ ,  $\kappa$  は境界における平均曲率の d-1倍である.

ここで, 
$$u_i, p, \theta, w_i, q, \xi$$
 は次の最適性の条件  

$$\int_0^T \left\{ t^V(u, t, w') + a^V(u, w') + b^V(u, u, w') + c(w', p) + f^f(w', \theta) - l(w') + c(u, q') \right\} dt = 0$$
(27)  

$$\int_0^T \left\{ t^H(\theta, t, \xi') + a^H(\theta, \xi') + b^H(u, \theta, \xi') + f_q^H(\xi') \right\} dt = 0$$
(28)

$$\int_{0}^{T} \left\{ -t^{V}(u', w_{,t}) + a^{V}(u', w) + b^{V}(u', u, w) + b^{V}(u, u', w) + c(u', q) + b^{H}(u', \theta, \xi) + c(w, p') \right\} dt = \int_{t_{1}}^{t_{2}} E_{\Omega_{D}}(u') dt$$
(29)

$$\int_{0}^{T} \left\{ -t^{H}(\theta',\xi_{,t}) + f^{f}(w,\theta') + a^{H}(\theta',\xi) + b^{H}(u,\theta',\xi) \right\} dt = 0$$
(30)

によって決定されたとき,Lagrange 汎関数の導関数は評価 関数の導関数と一致して,次の関係が成立する.

$$\dot{L}|_{u_i,p,\theta,w_i,q,\xi} = \dot{E}_{\Omega_D}|_{u_i,p,\theta,w_i,q,\xi} = \langle Gn_i, V_i \rangle$$
(31)

式 (25) で与えられる *Gn<sub>i</sub>* は, 評価関数の導関数において, 領域の微小変動を与える速度場 *V<sub>i</sub>* の係数関数になっている ことから,この問題における感度関数あるいは形状勾配関数 になっている.また,スカラー関数 *G* は形状勾配密度関数 と呼ばれる.

これらの方程式 (27)~(30) より  $u_i, p, \theta, w_i, q, \xi \epsilon$ 解析して, 形状勾配関数が評価できれば,力法を適用することが可能と なる.さらに,随伴問題における連続の式を考慮すると,形 状勾配密度関数 G は次のように表すことができる.

$$G = \int_0^T \{ -\frac{1}{Gr} w_{i,j} u_{i,j} - \frac{\partial \theta}{\partial t} \xi - \frac{1}{Ra} \xi_{,i} \theta_{,i} - \nabla_n (\xi \hat{q}) - (\xi \hat{q}) \kappa \} dt$$
(32)

一方,上記の流速時間履歴2乗誤差の式(22)における目標 値 *u*<sub>Di</sub> をゼロとし,上記の目的汎関数式(18)を maximizes  $\int_{t_1}^{t_2} E_{\Omega_D}(u) dt$ とすれば、部分領域  $\Omega_D$ において流速時間履 歴を最大化する形状決定問題にも拡張できる.また上記と同 様な手法を用いて、この流速時間履歴最大化問題に対応した 随伴方程式が導出できる.



Fig. 1 Solar tower model

#### 4. 解析手順

提案した形状設計解析は,次のステップを繰り返すことに よって解析できる.

Step 1. 初期形状を与える.

- **Step 2.** 状態方程式 (27),(28) に基づいて,時間 t = 0 から t = T の方向へ,流速分布  $u_i(\vec{x}, t)$ , 圧力分布  $p(\vec{x}, t)$ , 温度分布  $\theta(\vec{x}, t)$  を解析する.
- Step 3. 目的汎関数が停留したと判断されれば解析を終了 する.
- **Step 4.** 得られた流速分布  $u_i(\vec{x}, t)$ , 圧力分布  $p(\vec{x}, t)$ , 温度分 布 $\theta(\vec{x}, t)$  を用いて,随伴方程式 (29), (30) に基づいて,時間 t = T から t = 0 の方向へ,随伴流速分布  $w_i(\vec{x}, t)$ ,随伴圧力分布  $q(\vec{x}, t)$ ,随伴温度  $\xi(\vec{x}, t)$  を解析する.
- Step 5. これらの結果を用いて、式 (32) から形状勾配密度 関数 G を計算する.
- Step 6. 力法に基づいて形状更新量である速度場 V<sub>i</sub> を計算 して形状を更新し, Step.2 に戻る.

#### 5. 解析例

導出した形状勾配密度関数と力法を用いて解析した簡単 な二次元問題の数値例を紹介する.数値解析におけるプログ ラム開発は,FreeFem++<sup>(13)</sup>に基づいて行った.

## 5.1. 流速時間履歴規定問題(ソーラータワーモデル)

流速時間履歴規定の解析モデルとして、図1のようなソー ラータワーモデルを設定した.本論文のはじめにで述べたよ うに、発電効率向上を目的として、ソーラータワー内のター ビン位置での流速を増大させるように境界形状を設計する必 要がある<sup>(1)</sup>.本解析では、タービン位置における流速に対 し 50%の性能向上を目指した一つの例として、図1のソー ラータワー中央部の部分領域 $\Omega_D$ において、 $x_2$ 方向の流速  $u_2$ の流速時間履歴が、初期形状における流速時間履歴の1.5 倍となる境界形状を同定することを目的とした。

図1において、L = 1, a = 0.15, l = 0.025, d = 0.3 とし、 グラスホフ数 Gr = 70000、レイリー数 Ra = 49000 として 解析を行った.温度場の境界条件は、温度既知境界  $\Gamma_{\theta}$  にお いて $\theta = 1$ とし、 $\Gamma_q$  は断熱境界 ( $\hat{q} = 0$ )を仮定した.流れ場 の境界条件は、 $\Gamma_{\theta}$ 、 $\Gamma_q$ をいずれも壁境界  $\Gamma_u$  として  $u_i = 0$  と し、自然境界  $\Gamma_\sigma$  では $\hat{\sigma}_i = 0$  とした.初期条件は、領域全体に おいて $\theta_{ini} = 0$ ,  $u_{ini} = 0$  とした.過渡的な時間域 [0, T] を 想定し、時間積分は  $t_1 = 0$  から  $t_2 = T = 1600$ を時間刻み  $\Delta t = 1.6$  で行って、各時刻における圧力 p は平均値が 0 とな るよう一意に定めた。断熱境界  $\Gamma_q$ を設計境界  $\Gamma_{design}$  とし、 他の境界は形状変更の際には完全に拘束した。

図2から図4に解析結果を示す.図2に初期形状のメッ シュと最終時刻 (T = 1600) における温度分布, 流速・圧力 分布を示し,図3に得られた同定形状のメッシュと最終時刻 (T = 1600)における温度分布,流速・圧力分布を示す.メッ シュの要素数は 26,104, 節点数は 13,393 であり, 一部拡大し て示している.流速に対しては P2 要素, 圧力, 温度, 形状更 新量の解析に対しては P1 要素を用いた.図 4(a) に部分領域  $\Omega_D$ の中央における初期形状での流速時間履歴,目標流速時 間履歴,同定形状での流速時間履歴の比較を示し,図4(b)に 形状更新の繰り返しに対する目的汎関数の収束履歴を示す。 図3より,流速規定領域付近の流路を細くして,本山ら<sup>(1)</sup> が実験によって提案した形状と同様のディフューザ型形状が 得られている。図 4(a) より,同定形状の流速時間履歴が目 標の流速時間履歴に一致している。その結果として、図4(b) より、得られた同定形状では初期値を100%とした流速分 布2乗誤差が十分に減少して,ゼロ近傍に収束していること が確認できる.

## 5.2. 流速最大化問題 (ヒートパイプモデル)

流速最大化問題の解析例として,自然対流場のトポロジー 最適化を行っている Alexandersen らと同様の解析モデル<sup>(5)</sup> を設定した.解析モデルを図5に示す.本解析の目的は、図 5の上部に設定された部分領域 $\Omega_D$ において、 $x_1$ 方向の流 速 u1 の2 乗値が最大化する形状を決定することである。図 5 において、L = 1, a = 0.9, l = 0.025, d = 0.2 とし、グラ スホフ数 Gr = 70000, レイリー数 Ra = 49000 とした. 温 度場の境界条件は、温度既知境界  $\Gamma_{\theta H}$  において  $\theta = 1$ ,  $\Gamma_{\theta L}$ において $\theta = 0$ とした.  $\Gamma_{q1}, \Gamma_{q2}$ は熱流束境界とし、断熱境 界 ( $\hat{q} = 0$ )を仮定した. 流れ場の境界条件は、 $\Gamma_{\theta H}, \Gamma_{\theta L}, \Gamma_{a1},$  $\Gamma_{q2}$ をいずれも壁境界 $\Gamma_u$ として $u_i = 0$ とした. 初期条件は, 領域全体において  $\theta_{ini} = 0$ ,  $u_{ini} = 0$  とした. 圧力 p は平均 値が0となるよう一意に定めた. 定常な状態になるまでの時 間域 [0,T] を想定し、t<sub>1</sub> = 0 から t<sub>2</sub> = T = 24000 を時間刻 他の境界は形状変更の際には完全に拘束した.

図 6 から図 8 に解析結果を示す.図 6 に初期形状のメッシュと最終時刻 (T = 24000) における温度分布,流速・圧力 分布を示し,図 7 に得られた改善形状のメッシュと最終時刻 (T = 24000) における温度分布,流速・圧力分布を示す.メッ シュの要素数は 7,614,節点数は 4,103 である.図 8(a) に流 速最大化領域  $\Omega_D$  の中央における初期形状での流速時間履 歴,改善形状での流速時間履歴,図 8(b) に形状更新の繰り



Fig. 2 Mesh and distributions of temperature, flow velocity and pressure at final time (T = 1600) for initial shape



Fig. 3 Mesh and distributions of temperature, flow velocity and pressure at final time (T = 1600) for identified shape



(b)History of objective functional

Fig. 4 Time history of flow velocity and history of convergence for solar tower model

返しに対する目的汎関数の収束履歴を示す.図7より,左右 の設計境界を含む流路がやや膨らみ部分領域 $\Omega_D$ へ流体が流 れ易くなっていることが確認できる.図8(a)から初期形状 の流速時間履歴に比較して,改善形状の流速時間履歴の方が 高い値を示していることが分かる.その結果として,図8(b) において,初期値を100%とした流速分布2乗の値が改善 形状では約125%まで増加した.なお,本解析では,設計境 界 $\Gamma_{design}$ を断熱境界 $\Gamma_{q2}$ とし,形状更新において左内側の 設計境界 $\Gamma_{q2}$ と設計境界ではない $\Gamma_{q1}$ との境界で角部が生じ たため,解析を終了した.これは,形状最適化における問題 設定において,図5の左内側上部境界 $\Gamma_{q1}$ の形状更新を抑制 したためである.例えば,形状更新における設計境界を全内 側境界 $\Gamma_{q1}$ および $\Gamma_{q2}$ 等にすることよって,このような角部 の影響は改善できると考えられる.



Fig. 5 Heat pipe model

これらの結果より,流速を最大化させる問題に対しても提示する手法の基本的な妥当性が確認できた.

### 6. まとめ

本論文では、非定常自然対流場の部分領域において、流速 時間履歴を規定する、あるいは流速時間履歴を最大化する形 状設計問題に対する解法を提案した.問題の定式化を行い、 形状修正の感度となる形状勾配関数を理論的に導出し、形状 勾配関数に基づいて力法を適用した解析例から、提案した解 法の妥当性を示した.

今後の課題として、より過渡的な状態に着目した非定常自 然対流場、あるいは非定常乱流場における形状最適化に対し て検討することを予定している.

なお,本研究の一部は JSPS 科研費 JP18K03996 の助成を 受けて行われた.記して深く謝意を表する.

#### 参考文献

(1) 本山雅孝, 杉谷賢一郎, 大屋裕二, 烏谷隆, 長井知幸, 岡 田臣右: 熱上昇風を利用するソーラータワーの発電出









(a)Mesh (c)Distributions of flow velocity and pressure (b)Distribution of temperature

Fig. 7 Mesh and distributions of temperature, flow velocity and pressure at final time (T = 24000) for improved shape



(b) History of objective functional

Fig. 8 Flow velocity history and history of convergence for heat pipe model

力の改良, 第23回風工学シンポジウム論文集 (2014), pp.109-114.

- (2) 桃瀬一成,河野紘明,河原源太:熱対流場における形状 感度解析と最適化アプローチ,日本機械学会熱工学コン ファレンス 2009 講演論文集 (2009), pp. 177-178.
- (3) Park, H. M. and Ku J. H.: Shape identification for natural convection problems, Communications in Numerical Methods in Engineering, 17(2001), pp.871-880.
- (4) Aounallah, M., Belkadi, M., Adjlout, L. and Imine, O.: Numerical shape optimization of a confined cav-

ity in natural convection regime, Computers & Fluids, **75**(2013), pp.11-21.

- (5) Alexandersen, J., Aage, N., Andreasen, C. S. and Sigmund O., Topology optimization for natural convection problems, International Journal for Numerical Methods in Fluids, 76(2014), No.10, pp.699-721.
- (6) Coffin, P. and Maute, K.: A level-set method for steadystate and transient natural convection problems, Structural and Multidisciplinary Optimization, 53(2016), No.5, pp. 1047-1067.
- (7) 片峯英次, 河瀬賀行, 畔上秀幸: 強制熱対流場の形状最 適化, 日本機械学会論文集 B 編, 73(2007), No. 733, pp. 1884-1891.
- (8) 片峯英次,岡田直也: 非定常強制熱対流場の形状設計問 題の解法,日本機械学会論文集,83(2017), No.855, DOI: 10.1299/transjsme.17-00407.
- (9) 片峯英次、今井伸哉: 温度分布を規定する非定常自然対 流場の形状同定問題の解法,日本機械学会論文集,82 (2016), Vol.82, DOI: 10.1299/transjsme.15-00578.
- (10) 畔上秀幸:領域最適化問題の一解法,日本機械学会論文 集 A 編, 60(1994), No. 574, pp. 1479-1486.
- (11) 畔上秀幸:形状最適化問題の正則化解法,日本応用数理 学会論文誌, 24 (2014), No. 2, pp. 83-138.
- (12) 棚橋隆彦: GSMAC-FEM-数値流体力学の基礎とその応 用-(1991), アイピーシー.
- (13) 大塚厚二, 高石武史: 有限要素法で学ぶ現象と数理-FreeFem++数理思考プログラミング-, (2014), 共立出版.